校 長 室 だ よ り

防府市立牟礼中学校
R元．７．１

校歌に込めた思い～作曲者 高橋正剛先生～

校長　田中　俊光

学校には大きな耐火金庫があります。その中には創立以来の学校の歴史が詰まっています。先日、金庫の中に「校歌のこころ」という題の小冊子を見つけました。そこには、牟礼中学校校歌の作曲者、作詞者が校歌に込めた思いがつづられていました。平成６年の牟礼中学校開校１０周年記念へ向けて書かれたものです。今回の校長室だよりでは、作曲者の思いを紹介します。

〈作曲者略歴（高橋正剛先生）〉

昭和７年１月２３日生　東京都新宿区高田馬場出身　山口大学教育学部卒

防府市内中学校、山口大学教育学部附属光中学校、県教育委員会、県教育研修所等を勤務の後、勝間小学校長、佐波小学校長を歴任。

現在まで、校歌や園歌の作曲は十数曲におよび、牟礼中の他、市内では牟礼南小、松崎小、野島小などがあり、作詞者　岡田　岩吉　先生と共に作られた「防府市民の歌」、合唱組曲「佐波川」は、よく知られている。

〈防府市立牟礼中学校校歌作曲の経緯と想い〉

昭和６０年４月に牟礼中学校が開校するに当たり、初代校長の倉重豊先生から、校歌を作曲してもらえないかと相談を受けましたとき、私はとても嬉しく、喜んでこの大役をお引き受けすることにしました。それには四つの理由があります。

まず、私は昭和４７年からこの牟礼の地に住みついているので、地域住民の立場で校歌が作曲できる。次に、私は国府中学校の創設期に８年間勤務したことがあるので、その分身として新たに創設される学校の校歌を作曲することには特別の感慨がある。第三に、倉重校長先生は、私が新任教員として勤務した華陽中学校での教職の先輩である。更に、作詞の岡田先生は私の大学時代の恩師であり、これまでも先生の詩に何回か作曲させていただいているので、先生との作品がまた一つ増えて嬉しい。このような諸々の因縁を考えながら、私は牟礼中学校校歌の作曲を快諾（かいだく）しました。そして、わくわくする気持ちで、歌詞を待っていました。

２ヶ月余り過ぎて、７月４日、分厚い封筒をいただきました。開けてみますと、校歌の歌詞に加えて、原稿用紙２０枚にわたる解説文が同封されていました。これまで、いろいろ作曲してきましたが、これほど克明な解説付きの詩をいただいたのは初めてでしたので、私は岡田先生のこの作詞に対する並々ならぬ思いに深く感動し、詩と解説を一字一句熟読して、私なりのイメージを膨らませていきました。

７月２０日、牟礼中学校を初めて訪問し、倉重校長先生から学校経営についてのお話を伺い、それから、学校の中を見せていただきました。真新しい校舎、校庭の各所で、新調の制服やユニホームを着た生徒たちが、全く新しく着任された先生方と共に、新たな希望に輝いた面持ちで学習に励んでいました。こういった雰囲気に浸り、「新設校とは良いものだなあ」とつくづく実感しました。「この牟礼中学校は、私たちがこれからの伝統の基盤を築くのだぞ」というような、ピリッとした気迫を感じたのです。

校門の内側に設置された、これまた真新しい校訓碑には、「至誠」「自律」「奉仕」の文字が刻まれており、この校訓を指標として、先生方、生徒の皆さんが励んでいかれるのだということが、よく分かりました。校門に立って目を周囲に向けて見ますと、太陽の眩しい光を受けて、開けゆく牟礼の町が一望できました。そして、北東には、大平山が学校を抱き込むように懐（ふところ）を広げています。なだらかな山の緑の斜面が美しく輝き、平坦な山頂（いただき）は、「ひろやかな心を持てよ」と語りかけているように、優しく見えました。一方、敷山の頂（おうとつ）の凹凸は、対照的に歴史の奥行きと神秘さを感じさせてくれました。

こうして、新しい牟礼中学校の訪問を終えて、いよいよ作曲開始です。

私は、詩の一字一句を改めて読み直し、諳（そら）んじるようにしてイメージを描きました。しかし、反対にできるだけメロディーを作り出すことを抑制（よくせい）しました。それは、焦っていい加減なメロディーをつくると、それに災いされて本当に良いメロディーが生み出せなくなってしまうことを、これまで何回も経験しているからです。詩の韻律（いんりつ）や意味を吸収し、それが頭の中や心の中で十分発酵してから、メロディーとなって生み出されてくるとき、初めて自分で納得できるものになるのです。詩情の不消化のままで、

無理にメロディーを作ったとき、自分自身がそのメロディーに満足できません。満足できないメロディーしか浮かばないとき、作曲者として本当に困惑してしまいます。特に、人から依頼された曲がそのようになったら、どう責任をとったらよいのか。そう考えると、「どうか、よいメロディーをお与えください」と、神に祈る思いで、詩を読み味わうのです。

この校歌の詩は、三つの章からできています。各章は大きく三節でまとめられています。

まず、第一節のふしづくりに取り組みました。　「　太平の　　山裾とほく
さやかにも　樹々の梢と
輝ける　　われら若人　」

この三行は、まず校歌を印象づける、最も主要なモティーフとなるところです。このメロディーで、学校のもつ品格が表されます。私の脳裏に、校門に立って仰ぎ見た大平山の流麗な姿が甦り、峰の線でメロディーラインを描くことにしました。そして、その頂は「輝ける…」のところに位置付けることにして、ふしが生まれるのを待ちました。

８月１日の朝、車を運転して出勤途上、ちょうど裏道から国道２号バイパスの大平山入口に出たときです。美しい朝日の輝く青空から、フロントガラスを通して、待ち望んだメロディーが授かりました。そのメロディーを一生懸命たぐり寄せ、山口に向けて国道を走りながら、何回も心唱して覚え込みました。勤務先の県教育研修所に到着し、早速手帳にメロディーをメモしたわけです。そして、第二章、第三章の詩にも当てはめて歌ってみました。歴史を語っているこの詩にも、メロディーはうまく馴染んでくれるように思いました。

さて、今度は第二節のふしづくりです。　「　青雲の　　空もあかるく
清らなる　　丹き心を
ひとすぢに　掲げてゆかむ　」

ここには、伸びようとする、若人のエネルギーが感じられ、それを音楽で表現しなければなりません。そこで、躍動感のあるリズムを使い、さらに転調して、気分を盛り上げることにしました。

そして、一気に、第三節　「　ああ　牟礼中　牟礼中
われらの母校　」

へ繋いで、メロディーを終結させることにしました。ですから、曲の方は、第二節と第三節が一つの大きなまとまりになっており、全体として、二部形式に仕上げています。

なお、この第二・三節の部分は、中学生特有の男性の声を生かし、女声と対比的に歌う部分合唱を取り入れました。ここでは、合いの手が入る部分を男女が互いに十分歌うことによって、中学生らしい合唱の美しさを表現してもらいたいと思っています。特に、第三章最終フレーズの「われらの母校」は、女声が「ぼこうー」と高音を被せますが、この音には、いつまでも母校を愛し、母校を思慕していこうという気持ちが込められています。

このように、メロディーができたところで、ピアノ伴奏の作曲に入りました。

前奏は、校歌の旋律のモティーフと、終末のメロディーをつなげて、校歌の雰囲気を暗示しました。前半は、大らかで優雅に、後半は、弾むリズムと転調和声を使った力強い伴奏で、歌を支えることにしました。こうして、曲として作り上げてみますと、**いわゆる校歌風というのとは少し違ったスタイルの作品**になったと思っています。

楽譜を清書し、録音テープを添えて、校長先生にお届けしたのは、８月２８日でした。

この曲を演奏される牟礼中学校の皆さんには、岡田先生の作詞の意図と私の作曲の意図を理解していただき、中学校生活の指標としてこの校歌を歌われることは勿論のこと、卒業されても、いつまでも心の歌として愛唱していただきたいと念じています。なお、この校歌は、吹奏楽にも編曲しました。また、当時の音楽担当の工藤愛子先生から、マーチの作曲を依頼され、一年後に、校歌をトリオに挿入した「牟礼中行進曲」を作り上げました。このマーチも校歌と同様、吹奏楽部の皆さんによって折々演奏されていることを嬉しく思っています。

作品には、生命があります。この生命を育てるのは、この曲を歌う牟礼中学校の皆さんです。この校歌が何歳まで成長していくのでしょうか。これから大成していく皆さんの生命とともに、この校歌が、いつまでも成長し続けていくことを切に願うものです。

第三代校長の江山勝先生は、私の学生時代からの友達ですが、江山校長先生が、この校歌をとても大切にしてくださり、私に「校歌のこころ」を書いて欲しいと言ってこられました。ありがたいことです。

来年は、牟礼中学校開校１０周年だそうで、月日のたつ速さに驚かされます。当時を思い起こして、私の気持ちを素直に書き表してみました。牟礼中学校のますますのご発展と、生徒の皆さんのご多幸、ご活躍をお祈りいたします。　（平成５年８月２４日）

防府市立牟礼中学校校歌

大平の　山裾とほく
さやかにも　樹々の梢と
輝ける　われら若人
青雲の　空もあかるく
清らなる　丹き心を
ひとすぢに　掲げてゆかむ
ああ　牟礼中　牟礼中
われらの母校

都べに　いらかも高く
天平の　そを興さむと
いたづける　聖を知るや
たくましく　力にみちて
限りなき　学びの道に
ともどもに　励みてゆかむ
ああ　牟礼中　牟礼中
われらの母校

北に負ふ　矢筈が峯に
南風は　つひに競はで
散りにける　命しのばる
花影も　夕陽に映えて
いたはりの　心やさしく
世の人に　尽してゆかむ
ああ　牟礼中　牟礼中
われらの母校

（昭和６０年５月１８日）